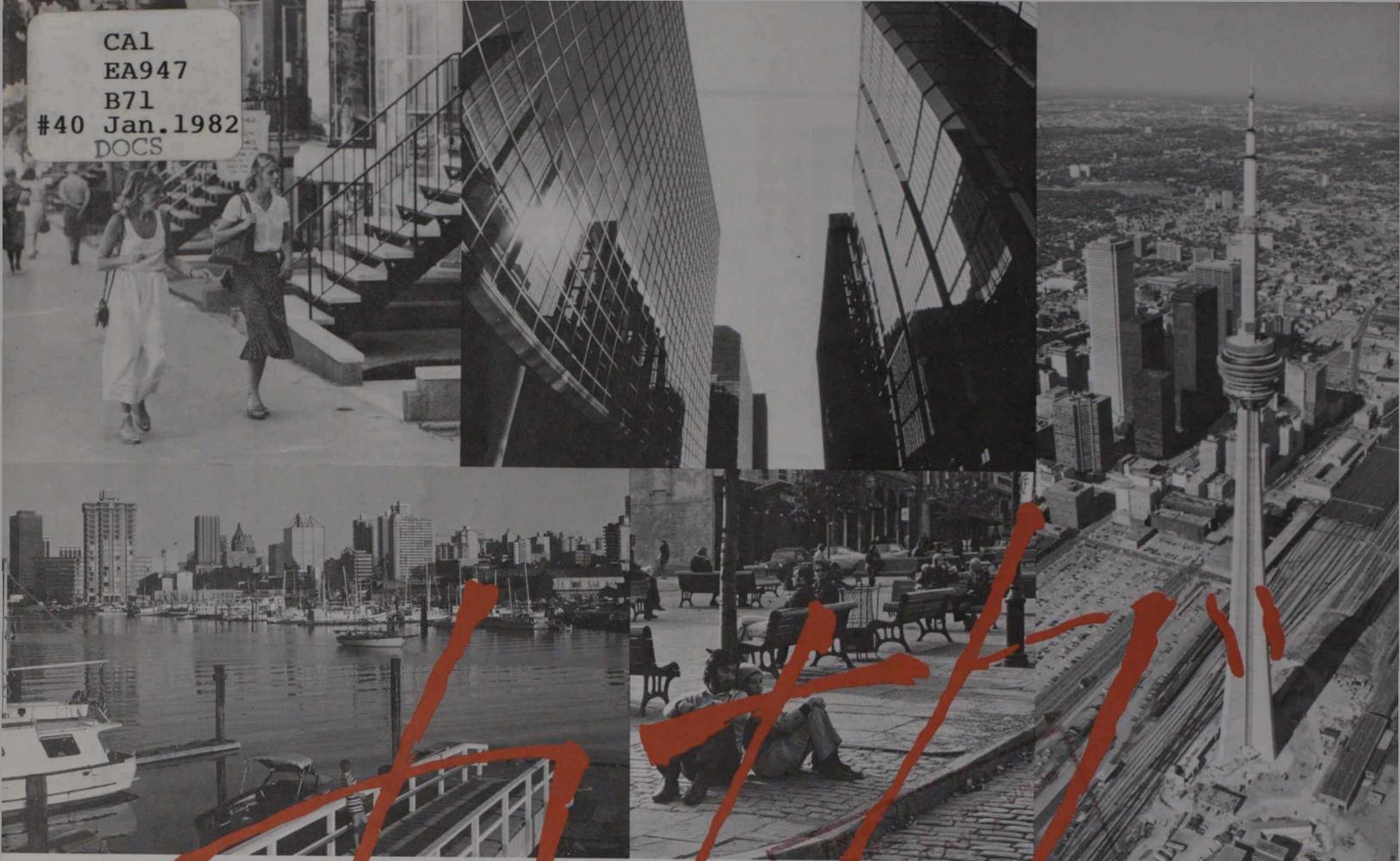
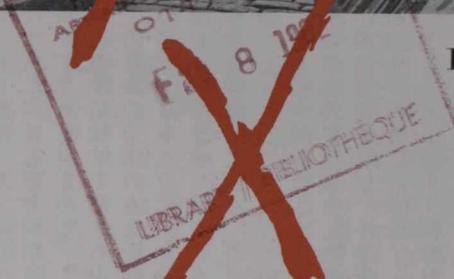


CAL  
EA947  
B71  
#40 Jan. 1982  
DOCS



1982年1月  
No. 40  
ISSN 0389-1852



トピックス	2
憲法案、連邦議会を通過	4
80年代カナダの経済開発	5
82年度の連邦政府予算案	7

カナダの都市  
「住みやすさ」文化への貢献・熊谷直勝 8

モントリオール	8
トロント	9
カルガリー	10
バンクーバー	11

カナダの冬は祭りの季節 13

われら姉妹都市①

守口市&ニューウエストミンスター	14
カナダ研究の潮流(3)・デビッド・スミス	15
カナダ人物記① ノースロップ・フライ	16
編集後記	16

LIBRARY E A / BIBLIOTHÈQUE A E

3 5036 01030022 9

60984 81800

# TOPICS

## マツギガン外相が来日 日加、多国間問題を協議

第二回日加外相定期協議に出席するため、マツギガン外務大臣が十一月中旬、園田外相の招きで来日、二日間にわたって二国間および多国間の諸問題について意見を交わした。



園田外相の歓迎を受けるマツギガン外務大臣。

席上、マツギガン大臣は①日本はカナダからの工業製品および加工品の輸入を増やして欲しい②カナダは日本に対する天然資源の安定供給を図るつもりであるが、日本も木材、水産物、金属などの分野で市場をもっと開放してもらいたい③日本が米国、欧州に対して

行っている黒字減らしは、カナダに悪影響がないようにして欲しい④カナダの外資法は外資を除外するためのものではなく、投資する側にとっても、またカナダ国民にとっても利益があるようにするというのが目的——などとカナダの政策や立場を説明した。

多国間の問題では、東西関係、南北関係、軍縮、朝鮮半島、中国、カンボジア、環太平洋などについて協議、多くの点で意見の一致を見た。

日加外相定期協議は、一昨年少ナダを訪問した故大平首相とトルドー首相との会談で設置が決まったもので、第一回協議は昨年七月、オタワで開かれた。

## 秋田と北陸にカナダ協会 経済・文化交流を促進

東京、関西、北海道に続いて、秋田県と北陸にもカナダ協会が誕生した。

秋田では、積雪寒冷地同士として、またカナダの亜鉛鉱や木材チップ、建築材などを通じた経済交流、そして大学のカナダ研究などに加えて、郷土出身の須磨末千秋氏が駐加大使として赴任していたこともあって、カナダへの関心が高まっていた。そこで昨年八月

五日、「秋田・カナダ友好協会」を設立、秋田県とカナダの経済・文化交流をさらに促進して国民同士の相互理解を深めることになったもの。会長には、秋田商工会議所の松本修士会頭が就任した。

また北陸でも、気候風土が似ていることや、カナダの森林資源、穀物が北陸に輸入され、北陸からは電子部品などが輸出されているといったこれまでの関係をさらに発展させようと、十月三十日、富山県の経済人を中心に「北陸・カナダ協会」が設立された。会長は中橋甚一富山県議会議員。

## カナダ映画に金賞 日本の子供がテーマ

カナダ映画「Children of the Tribe」(カーレ・ラースン監督、サイコマディア制作)が、昨年十一月に行われた「日本紹介映画コンクール」で金賞を射止めた。

この作品は幼児期から少年期までの日本の子供の成長を描いたもので、「日本式育児」や学校での激しい競争を通じて、日本社会の特徴を紹介している。長さは三十分。

日本紹介映画コンクールは、日本映画海外普及協会と映像文化製作者連盟が主催し、外務省と朝日新聞社が後援している。

また、アルバータ教育放送協会が制作したラジオ番組「ガラガラへび」が、NHK主催の教育番組国際コンクール「日本賞」の優秀

番組賞に選ばれた。

## 駐加日本大使に御巫氏

須磨末知秋駐加日本大使の後任に、外務省研修所長の御巫清尚氏(写真)が就任した。



御巫氏は三重県出身で、昭和十八年外務省に入り、在英大使館一等書記官、在インドネシア大使館参事官、経済協力局長、大臣官房審議官、国際協力事業団理事、駐フィリピン大使などを歴任した。

## トロントーモントリオール間に カナダ製の高速列車LRC

カナダの全国鉄道旅客公社ピア(VIA)カナダは、トロントーモントリオール間の列車混雑を緩和するため、カナダ製の高速列車LRC(軽量・高速・快適)の導入を計画、昨年から試験的に運行を開始した。

LRC列車は、モントリオールのボンバルディエ社が中心となつて開発した純国産車両で、列車がカーブにさしかかると遠心力センサーが働き、客車が適度に傾いてバ

ランスをとるといふ車両傾斜技術を採用している。このため、カーブでもさほど減速する必要がなく、揺れが少ないため、乗り心地もよい。最高時速は約二百四十四キロだが、当面は約百五十二キロ、モントリオールートロント間を五時間て走る。

ピア・カナダでは、今後、ケベック市、ウインザー、オタワ、モントリオールなどの各都市間にLRCを導入していく予定だ。

また米国の鉄道旅客公社アムトラックでも、現在、LRCを試用中である。

## カナダの日本向けなたね キャノーラ種に切り換え

カナダから日本に輸出されるなたねの大部分が、一九八二年には健康に良い改良品種に切り換えられる見通しとなった。

これは昨年十一月四、五の両日、東京で開かれた第五回日加なたね協議でカナダ側(アームストロング通産省穀物流通局油糧種子課長)が明らかにしたもので、自然条件などが原因でこれまで新品種への移行が遅れていたアルバータ州でも切り換えが進んだ結果、今年の日本向け輸出は新品種が中心となり、一九八三年にはすべて新品種となる見通しだといふ。

輸入なたねは食用油、油かす(飼料)に使われるが、新品種(キャノーラ)は動物や人間に有害とさ

れるエルシン酸とグリコシノレイドがきわめて少なく(そのため「ダブル・ロー」または「ダブルO」とも称される)、在来種と比べて飼料価値、食用価値がはるかに高い。カナダでは、すでになたね耕作面積の八八パーセントがキャノーラ種に変わっており、今後三年ぐらいの間にすべて改良種にする計画である。

日本は昨年百五万八千トンのなたねを輸入したが(今年は百十三万余トンの見込み)、その九九パーセント以上はカナダ産であった。

### 世界を結ぶ文字図形情報網 カナダ、「ノバテックス」を創設

カナダの国際電信電話公社テレグロフ・カナダと通信省は、このほど世界各国の企業や大学、政府機関、報道機関などがカナダの産業情報やニュースなどを随時利用できる国際情報データベース「ノバテックス」を創設した。

ノバテックスは、カナダ通信省が開発したビデオテックス(双方向文字図形情報システム)「テリドン」を利用して、トロントのテレグロフ本社のデータ・バンクを通じて世界各地に鉱物、エネルギー、農産物などの市況や一般情報を即時に流そうというもので、利用者は長距離電話やデータ回線によってテレビ画面に必要な情報を文字や図で写し出せるようになっている。双方向システムであるため、同じ組織内での通信にも使え

る。

すでにワシントン、ニューヨーク、ロンドンなどのカナダ大使館、領事館には設置済みで、在日大使館にも近く導入の予定だ。

テリドンは、最近、西独の世界的エレクトロニクス・メーカー、シーメンス社との間に輸出契約が成立し、欧州各地でも、ノバテックスの利用が広がるものと期待されている。

### 宇宙船の腕がテストに成功 スペースシャトルで活躍期待

昨年十一月に行われた米国の宇宙連絡船(スペースシャトル)「コロンビア号」の二回目試験飛行で、宇宙連絡船の「手」ともいうべきカナダ製の遠隔操作システム(RMS)が屈伸、回転などの機能テストに成功、今後の活躍が期待されている。

このシステムは、国立科学研究所(NRC)が米国のスペースシャトル計画に対するカナダの贈物として設計し、トロントのスパ・エアロスペース社が製作したもので、重さ四百八十キログラム、直径三十八センチ



コロムビア号でテスト中のRMS

子、長さ十五・三メートルのこの

「腕」は、人間の腕と同じように上腕、前腕、手の三部分からできている。肩、ひじ、手首の関節部に強力なモーターが組み込まれていて、上下左右と自由自在に動かすことができ、手の部分はものをつかんだり放したりできるようなっている。スペースシャトルに乗った宇宙飛行士は、ひじや手首部分に取りつけられたテレビカメラを見ながらコンピュータまたは手動でこの腕を操作する。

十一月のテストではトルーリー宇宙飛行士が手動、コンピュータによる完全自動など各種の方法で「腕」を伸ばしたり前後に動かすなどして、無重力状態でちゃんと作動することを確認しただけだが、いずれは人工衛星などの物体を宇宙に放出し、衛星を軌道に乗せたり軌道修正したり、あるいは故障した衛星を連絡船の貨物室に回収するのに使われることになっている。

### 札幌で全道カーリング大会

北海道カーリング協会(森鼻武芳会長)は、三月十三、四の両日、札幌市でアルバータ州提供の「アルバータ杯」をめぐる初の全道カーリング大会を開催する。

北海道では、池田町、網走市など五市町に協会ができていたほどカーリングが盛んで、全道大会には各地区で選抜されたおよそ三十チームが参加する見込みだという。

### 畜養したシヤンポ・マグロ カナダから日本へ空輸

大西洋岸で捕獲したマグロを、そのまま海中で「飼育」して脂がよく乗ったところ飛行機で日本へ送る——世界でも珍らしいシヤンポ・マグロの畜養が、カナダと日本を結んでいる。

ニュー・ブランズウィック州のセント・マーガレット湾には、毎年大西洋を回遊している本マグロがイワシやサバを追って大挙入ってくる。ところが、カナダではマグロの人気は高くない。以前は湾内の定置アミにかかったマグロを、アミをこわされないようにわざわざ逃がしていたのだが、マグロが日本では重宝されていることを知って、何とか活用する道を考えて、そこで日本の畜養技術をとり入れ、いろいろ試みてみたところ、湾内のアミに封じ込めたマグロが、エサとして投げ入れたイワシを食べるようになった。七、八年前のことである。このようにして夏から秋にかけて約三か月間人工的に畜養した本マグロは、脂がよく乗って味は上々、大きさも体長三メートル以上、体重三百キログラムにもなる。中には五百キログラムという「大物」もある。

今では毎年百尾ほどが畜養されており、すべて冷蔵のまま日本に空輸されている。水揚げから日本に到着するまでわずか四十八時間しかかからないため、鮮度は近海

ものほとんど変わらない。



セント・マーガレット湾内で捕獲された本マグロ(完成商事提供)

これまではすべて高級料理店などに引き取られていたが、最近西友ストアがこの本マグロを二十尾直輸入して全国各地で販売、好評を得た。

### 広報資料案内

当広報部では、次のような広報資料を発行しました。ご入用の方は、八方キで広報部宛てご請求下さい。無料で郵送します。

- 一、カナダの全十州および二準州を個別に紹介した背景説明(州別にご請求下さい)。
- 一、「カナダの通信技術」
- 一、「一九八〇年代におけるカナダの経済開発」
- 一、「デビッド・スミス教授「カナダにおける大平原諸州の地位——地域的執念」

# 憲法案、連邦議会を通過 英議会の承認後に発布

カナダが自主憲法をもち、名実共に独立国家となる日が近づいた。

カナダ連邦議会の上院は十二月九日、前月下院を大差(賛成二四六、反対二四)で通過した「憲法決議案」を、賛成五九、反対二三で可決、連邦政府は決議案をただちに英国議会議に送付した。英国議会議は一月中に審議を開始する予定で、カナダの要請通り、何の変更も加えずに同決議案を承認することが確実視されている。英国議会議の承認、エリザベス女王の裁可があり次第、カナダ政府は決議案を新憲法として発布する運びとなる。

これにより、カナダは一八六七年の建国以来続いていた「不自然な状態」によりやく終止符を打つことになる。一九三一年の「ウェストミンスター条例」の結果、英連邦下の自治領はそれぞれ母国と完全に同等な独立国として自らの憲法を有することになった。しかし、カナダで

は憲法に相当する「英国領北アメリカ法」(BNA)の修正方法について意見がまとまらなかつたため、同法に関する法的権限を引き続き英国議会議に付託することになった。それが、五十年目にしてようやく改められるわけである。

決議案は、BNAのカナダ移管を明記しているほか、次のように権利と自由の憲章、原住民の権利、憲法会議、地域格差の是正および憲法改正の方法と手続きについて条文化し、さらに資源に関する条項を含めた内容になっている。

## ●権利と自由の憲章

良心、宗教、思想、信条、言論、平和的集会などの基本的自由、選挙・被選挙権、州間を移動・移住する権利、生命や自由への権利、不当な捜索に対する権利などの法的権利、そして法の下における個人個人の平等を保障する。

英語とフランス語は、連邦政府と連邦議会のすべての機関およびニュー・ブランスウィック州政府と州議会議において、同等の地位と権利を有する。

英語系住民またはフランス語系住民が少数派である州において、その少数派の言語を第一言語とする場合、あるいは本人が少数派の言語で初等教育を受けている場合、その州において子供にも同じ言語で初等、中等教育を受けさせることができる。自分の子供が一人でもカナダで英語もしくはフランス語による初等または中等教育を受けたことがあるか、あるいは現在受けている場合、親はほかの子供たちにも同じ言語で教育を受けさせる

権利を有する。

## ●原住民の権利

原住民(インディアン、イヌイット、メティス)に対する既存の権利を確認する。

## ●平衡化と地域格差

連邦議会議と各州議会議は、カナダ政府と共に、地域格差の是正を図る。連邦議会議と連邦政府は、各州政府が公的サービスの格差なく実施できるよう、平衡交付金を支払う原則を支持する。

## ●憲法会議

連邦政府首相は、この条項が発効して



憲法決議案が連邦議会議を通過、議員たちから祝福を受けるトルド首相(中央)。

から一年以内に、同首相と各州首相で構成する憲法会議を開催する。

## ●憲法改正の手続き

憲法改正は、上下両院の決議、もしくは全州の人口の過半数を占める三分の二(七州)以上の州の同意が必要。憲法改正が、ある州の権利、権限、あるいは特典を減ずる場合、その州は州議会議の過半数の承認を得てこれらの権利、権限、特

典を保留することができる(ただし五年目に再決議が必要)。教育その他の文化的事項に関する立法権を州から連邦議会議に移管する憲法改正がなされる場合、連邦政府はこの改正の適用除外を希望する州に対して妥当な補償を行う。女王、総督、下院議員の州別定員、最高裁の構成といった重要事項に関する改正は、上下両院および各州議会議の承認を必要とする。

## ●一八六七年憲法(BNA)の修正条項

BNA(一八六七年)第九十二条のすぐあとに、非再生天然資源、森林資源および電力に関する条項(九十二条A項)を追加する。同項は、各州において、州内の非再生天然資源の探査、非再生天然資源および森林資源の開発・保護・管理、発電施設の建設・保全・管理に関する法律は、州議会議のみが制定できる」と定めている。

この憲法決議案は、公布とともに、「一九八一年憲法」として、一八六七年のBNA、それ以後のBNA追加条項、その他の法令や総督令、これらの法令の修正条項とともに、「カナダ憲法」を構成する。

なお、憲法決議案に依然として反対しているケベック州政府は、他の九州と連邦政府が合意した憲法案に対して拒否権をもってると主張、ケベック上訴裁判所に提訴した。連邦政府は、BNAのカナダ移管は連邦政府が単独でできるという昨年九月の最高裁判所の決定を引用して、ケベック州の考え方には根拠がないと反論している。

## 八〇年代の経済振興計画

# 資源開発を柱に工業化

昨年六月、トルドー内閣は国家経済開発のための政策と優先事項をまとめるため、マケツカン大蔵大臣（副首相）を委員長とする臨時閣僚委員会を設置した。同委員会は、内閣経済開発委員会と協力して数か月にわたり検討を続け、一九八〇年代における経済開発・振興のための政策目標を設定した。その報告「一九八〇年代におけるカナダの経済開発」の要旨を、紹介しよう。

### 経済活性化に大きな可能性

一九八〇年代は、カナダにとって大いに期待のできる十年間である。カナダがその経済を再活性化し発展させる、かつてない規模の可能性をもっているからである。

その第一の可能性は、カナダの豊かな天然資源にある。エネルギー、穀物や水産物などの食糧品、林産品、石炭や塩化カリなどの鉱物——といったカナダの主要資源に対する国際的需要は高まる一方で、カナダではエネルギー産業および石油化学などエネルギー関連産業の大幅な発展と、農業・畜産、林産関連産業、鉱業の拡大が期待されている。

しているが、カナダ製品の国際競争力を高め、国内産業の生産性を向上させるためには今後とも技術革新に力を入れていく必要がある。こうした三つの可能性を追求していくことと併せて、工業部門の方向転換と再編成を図らなければならない。競争力のない産業や企業を保護するため金をつぎ込めば、カナダの生産性を抑え、貿易上の対外競争力を弱めて、すべての国民に悪影響を及ぼすことになる。したがって生産性が高く、対外競争力の強い部門に力を入れていく必要がある。

### 経済振興の機会は今全国各地に

そのためには膨大な投資が必要となる。政府の「主要プロジェクト調査委員会」によると、今世紀末までに四千四百億ドルもの投資がエネルギーおよび資源の開発・利用を中心としたさまざまなプロジェクトに向けて検討されているという。第二の可能性は工業の発展。資源開発に要する数々の機械や装置、物資を供給し、また資源の加工度を高めるため、今後工業が活発化することは間違いない。資源開発と資源関連産業の発展は、伝統的な工業地帯だけでなく、資源産出地域でも、大規模な工業の振興を促すはずである。

第三の可能性はカナダ人の創造性。カナダは、すでに原子力技術、航空宇宙産業、通信産業、データ処理、都市交通機関といった分野で、その技術的実績を示

強味。

一大飛躍が期待されているのが西部諸州。今世紀末までに検討されている主要プロジェクトへの全投資額の実に半分以上は、西部カナダが対象になっている。また北方ではさまざまなエネルギー開発プロジェクトが進行中。開発は、もちろん現地住民の生活や自然環境への影響

## GNPの年間伸び率2.7%

インフレは緩和——中期見通し

昨年十一月に提出された新予算案の経済見通しによると、八一年の実質経済成長率は通年で三・五パーセント強、消費者物価は一二・七パーセント増、失業率は七・二パーセントとなっている。

八一年の中期見通しでは年間平均実質経済成長率は、国内のインフレ対策、米國など主要貿易相手国で予測される低成長、生産性の低迷などを反映して二・七パーセントの見込み。失業率は八三年度にピークに達したあと低下する。またエネルギー、食糧、輸入品の価格上昇がにぶり、インフレも徐々に緩和され、八七年には七・一パーセントまで下がる予想だという。米國におけるインフレ緩和、金利低下を反映して、カナダ・ドルはやや持ち直すものと見られる。

を十分に考慮しながら進めなければならぬ。

八〇年代におけるカナダの経済発展政

策を実施する上で、政府はいくつかの点に留意する必要がある。まず、健全な経済発展のために、秩序ある資源開発をすること、国家的また地域的観点から政策を考え、同時に国際市場の動きを念頭におくこと、そして全国のあらゆる地域が等しく安定的かつ自立的経済基盤を築いていけるようにすること、である。

また、対外的には保護貿易や不公平な競争に反対し、国内的には各州と緊密に協力しつつ、全国各地の経済開発を進める。産業界に対しては、経済基盤を強化するような投資や産業活動を支援するほか、技術革新や産業再編、産業規制などの面で市場強化を目的とした政策を進め、民間の能力をこえた開発プロジェクトを引き受けるといった形で協力する。

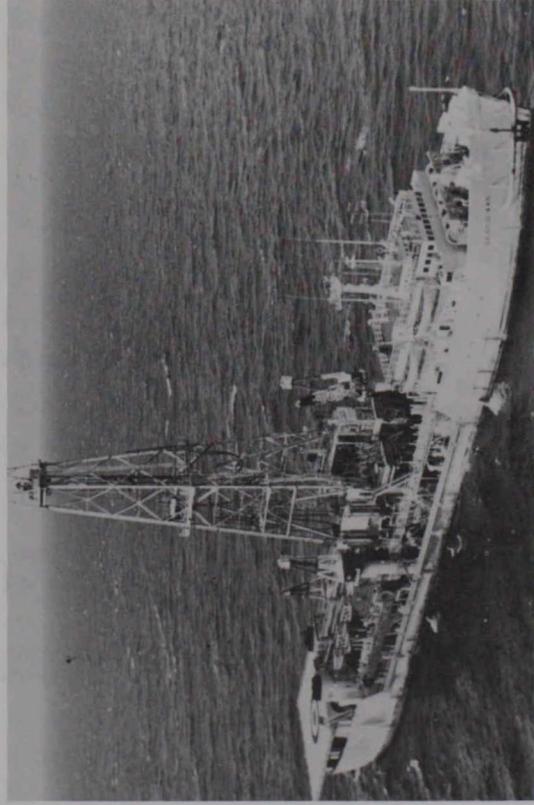
### 外資審査法の改定は棚上げ

外国からの投資については、現在の政策を引き続き実施する。カナダは歴史的に、その経済発展を外国資本に大きく依存してきた。国内で資金をかなり調達できるようになったとはいえ、八〇年代およびそれ以後の発展を確保するには、カナダは今後とも外国の資本および技術を必要としている。

一昨年の国家エネルギー計画(NEP)で「カナダ化」政策を打ち出したのは、国内の石油・天然ガス産業におけるカナダの所有と管理の度合いを強めるという政府の長年の目標を具体化したものであ

る。NEPには、エネルギー確保、エネルギー収益の公平配分という目標が盛り込まれている。ただし、石油・天然ガス産業のカナダ化強化に向けた特別措置を他の部門に適用するのは妥当でない、というのが政府の考えである。

申請された外国からの投資がカナダに相当の利益をもたらすかどうかについて政府に進言する外国投資審査庁は、一九七四年の設立以来、各国からの数々の申請を公平に取り扱ってきた。これまでの経験にもとづいて一九八〇年には審査法の改正が提案されたが、審査法の改正に関する立法措置は当分とらない。



北極・ポーヴォート海での石油探査。政府が推進しようとしている大型プロジェクトには、このほか北方カナダから国内諸都市および米国への石油パイプラインの敷設、オイルサランド開発、重質油開発、ブリタイッシュ・コロンビア州北東部の開発、大西洋沿岸海底石油の開発などがある。

### 経済振興の五大施策

カナダの経済発展の基礎となるさまざまな可能性を実現するため、連邦政府は次のように、産業開発、資源開発、輸送、輸出振興、人的資源開発の五つを、重要課題としてあげている。

**産業開発** 政府は大型プロジェクトが工業およびサービス部門の収益性を向上させ、技術革新がカナダの産業の生産性と競争力を高め、また市場の要請に対応する産業再編が健全かつ生産的に行われ

るような政策を策定する。こうした政策は、地域経済開発を念頭において実施する。

技術革新に関する政府努力の例として、バンクーバー、エドモントン、ウイニペグ、トロント、シャールックおよび大西洋沿岸地域におけるマイクロエレクトロニクス・センター設置への支出、文字図形情報システム「テリドン」の応用・販売のための二千七百五十万ドルの追加支出、高度技術産業に対する三千万ドルの補助などがあげられる。政府は産業界での研究開発に年間三億ドル近くの助成金を投入しているが、今後

はこれらの研究開発を調整・促進するため、通商産業省に産業機会計画審議会を設けることになった。

**天然資源開発** 連邦政府は五つの主要資源関連分野のための新しい措置を講ずる。資源はカナダの発展に不可欠であり、政府はその健全かつ長期的な開発・利用を心がけるほか、大気、水、土壌などの保全に万全を尽くす。

政府措置の第一は、一九八〇年十月に発表された国家エネルギー計画である。これは一九九〇年までに石油の自給自足を達成しようというもので、政府はそのために必要な大々的な探査・開発に、一九八五年度までに二百億ドル近くを支出する計画になっている。

第二は、各種農産物の輸出市場開発などを目的とした「農産物・食糧戦略」。これは現在、連邦政府と州政府の間で協議中である。

第三は、二百カイリ経済水域を最大限効果的に利用しようという水産部門の秩序ある開発。

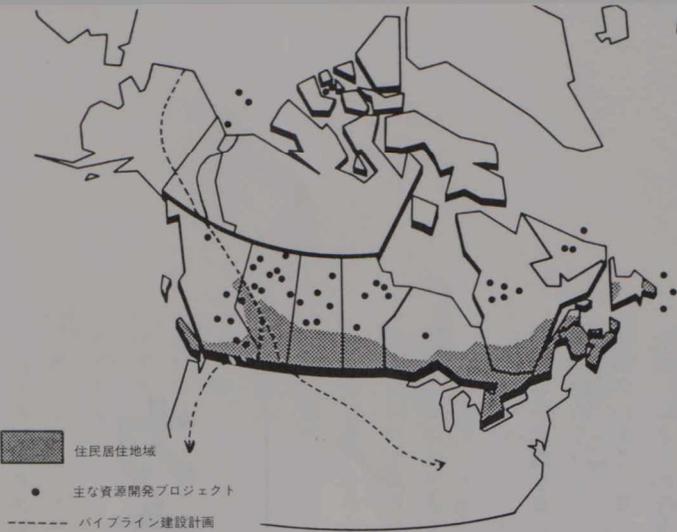
第四は、林産関連産業の長期的発展のための政策で、良質の木材を安定価格で供給し続け、また資源の有効利用を図るために、連邦政府は州政府と協議を重ねている。

第五は、引き続き強い需要が予想される鉱業部門の競争力を維持すること。政府は、既設の輸送施設から遠く、そして気候の厳しい地域での探査・開発を促進するため、この部門における研究開発に力を入れる。

### 輸送開発 資源関連産業の経済的恩恵

をじゅうぶん享受するには、輸送システムの整備が必要である。穀物、石炭、肥料、林産品などの輸出を拡大するには、大量輸送の能力を高めなければならない。

そこで連邦政府はプリンス・ルパート（ブリティッシュ・コロンビア州）に新設する穀物集積所のための港湾施設整備に二千七百万ドル、道路整備に四百万ドルの支出を計上している。また日本を中心とした環太平洋諸国向け石炭の出荷能力を高めるため、バンクーバーのロバーツ・バンク集積所の規模を四倍に拡大するほか、対日輸出が決まったブリティッシュ・コロンビア州北東部の石炭を輸送するため新しく港湾および鉄道網を整備



することにしている。西部カナダにおける輸送システムの近代化と拡充も急務で、連邦政府では今後四年間に十三億ドルの支出をそのために予定している。

### 輸出振興 国際貿易の状況は変わりつつある

輸出市場は競争が一層激化し、より複雑になった。開発途上諸国や計画経済諸国との取り引きには、政府間交渉を要し、あるいは経済外の側面への考慮

を要する場合が多い。カナダの企業は輸出力を高めるために、今後、政府の支援を得る必要があると同時に、他のカナダ企業との提携やコンソーシアム結成といった協力関係が一層必要となろう。連邦政府は、そういう必要性に慮って、すでに主要な在外公館の商務担当者を増やし、輸出市場開発計画を強化したりするなどの措置をとっている。そのほか、輸出開発公社による輸出融資や融資保証も輸出振興に大きな役割を果たしている。

### 人的資源の開発

八〇年代におけるカナダの経済発展は、一人一人のカナダ人の教育、訓練そして雇用機会が大きくなるの言う。とりわけ、技術の需要と供給のバランスがうまくとれているようにしなければならない。たとえばマイクロエレクトロニクスの応用により単純作業が減る。また大型プロジェクトは、管理やエンジニアリングなどの分野で新しい技術者を必要とする。

こうした状況の変化にあわせて、学校や職業訓練機関の教育内容を変え、また中高年者向けの再訓練を実施する必要がある。政府はすでに、八〇年代の経済情勢を考慮した労働市場政策の総合的検討を実施するなど、さまざまな対策を打ちだしている。

障害者や女性、原住民など、これまであまり恵まれなかった人々も忘れてはならない。政府は、原住民の雇用を増大するため、八五年度までに三億五千万ドル支出することになっている。

## 物価対策、経済再生を強調

### 八二年度の連邦政府予算案

支出抑制、税負担の公平化、経済の活性化——この三つを柱とする来年度（八二年四月—八三年三月）のカナダ政府予算案が、昨年十一月十二日、マケツカン蔵相から発表された。

マケツカン蔵相によると、予算案の最大の目標はインフレ抑制。今年度の実質経済成長は八〇年十月の予測一パーセントをはるかにこえ、三・五パーセントを上回る見通しだが、消費者物価指数も年間一・七パーセントに達する見込み。活発な資金需要と物価の騰貴、それに米国における記録的高金利が重なって、カナダでも金利が大きく上昇した結果、消費や企業活動の停滞を招いたほか、住宅ローンを借りている人や中小企業などに大きな影響を与えた。

予算案はこうした状況を改善し、経済の再活性化を図ろうというもので、主要内容は次の通り。

● 支出抑制 財政赤字を本年度の百三十三億ドル（予測）から百五億ドルに減らす。カナダ銀行による通貨供給量の抑制はインフレ対策のひとつのかなめであり、これをさらに財政支出の抑制によって支える。

● 税負担の公平化 所得税法上の十一の控除項目を廃止あるいは改定し、連邦税率を下げる。これにより、高所得者の税負担が増し、中・低所得者の負担が軽減される。さらに、高金利の影響を最も

強く受けている住宅ローン返済者、中小企業、農家に対し、ローン返済繰り延べ、低率融資などの救済策を講じる。

● 経済の再活性化 今回の財政戦略の目的はすべて、高率のインフレと金利の問題を解決して今後の経済成長の基礎固めをすることにある。八〇年代の経済開発の優先分野として産業開発、資源開発、輸送システムの整備、輸出振興、人的資源開発に力を入れ、経済の再活性化、競争力の強化、地域格差の是正を図る。そのために六百億ドルを支出する。

予算案は、このほか、外国投資審査法（FIRA）強化の棚上げを提案し、石油および天然ガス産業の「カナダ化」を強めるという国家エネルギー計画（NEP）の特別措置は他の分野には適用しない、との方針を明らかにしている。

連邦政府財政計画-収支状況(単位100万ドル)

	1981-82	1982-83
一般会計収支		
歳入	54,310	64,960
歳出	-67,650	-75,450
残高	-13,340	-10,490
予算外収支(財政投融资)		
貸付・投資	-650	-850
特別会計	3,720	3,550
その他	495	1,205
残高	3,565	3,905
調達必要額 (外為収支を除く)	-9,775	-6,585
支出総額	68,300	76,300

# カナダの都市

## 「住みやすさ」文化への貢献

熊谷直勝

ここにひとつ、カナダの地図がある。何やら不思議な鳥の形をした地図だ。これを眺めていると、一瞬この「鳥」が、宇宙のいずこへ舞いあがるのか、といった思いにとられる。

この地図は、一九七二年、サイモン・フレージャー大学と、プリティッシュ・コロンビア大学が共同開発した地図、アイソデモグラフィック(等人口統計学地図)である(注1)。この生態的ともいえる地図は、国勢調査を行う統計単位面積を基礎に、人口を比例的に算出し図示する方法で、人口の多いところはそれだけ面積がふくらむことになる。したがって、都市は、バンクーパー、トロント、そしてモントリオールという風に、あきらかにクローズアップされたエリアとし



モントリオールの住宅街。カナダでは各地で人間中心のコミュニティづくりが進んでいる。

1、トロント、そしてモントリオールの三都市が極めて大きな地位を占めて登場してくることはいうまでもない。

### 「ほっこりする」カナダの都市

カナダ人にとって都市とは何なのだろうか。旅行、仕事、里帰りなどおえて自分の街にもどるときの心情に、何か積極的なものはないのだろうか。とりわけアメリカからカナダに帰るときに見られるカナダ人の表情には、なぜかほっとしたものがあふれている。といえはおおげさだろうか。このことをカナダ人に尋ねたときにかえってくる答えは、皆一様に「カナダの街は「住みやすい」からだ」というのである。

モントリオールに帰れば、あのプラスや地下街が、冬の寒さをやわらせてくれ

て目にすることができるのである。

モントリオールは、いっばいに食物をとりこんだ鳥の胃袋であり、トロントはふくらみのある胴体、そしてバンクーパーは羽根の先をつかさどり、その先端がビクトリアである。これらにまたがるようにして、羽根のところにエドモントン、カルガリー、サスカトウーン、レジン、ヤイナ、羽根のつけ根に大きくウイニペグがある。胴体からしっぽにかけてハミルトン、ロンドン、ウインザー等。そしてくちばしの上がセント・ジョンズ、下がシドニー・グレース・ベイ、ハリファックス、あごのところにセント・ジョン等で、プリンス・エドワード島のシャローットタウンは、このくちばしに見える舌のような感じだ。頭のところはむろんケベック・シテイ、そして胃と胴にはさまれた心臓のところがオタワで、それぞれの都市みな象徴的な配置になっていて印象的である。

カナダのイメージの中に、バンクーパー

はなやかな北のイメージを誇らし気に語りたくなる人もいる。トロントへの帰路空港からバスで地下鉄へいそぎ、ヤングでのりかえてわが家にもどるのもひとつの方法だ。むかえの車がなくても、交通システムの完備は住みやすさの一端をそれとなく感じさせてくれる。バンクーパーにもどれば、ロッキーマウンテンはもう白くなっているだろうか。澄んだ空気に魚貝の料理が待っている。これらのイメージは、むろんふるさとを想う心情として誰もが持ち得るものにちがいないが、カナダ人が共通して答えた「住みやすさ」の意味を重ねて考えることによって、カナダの都市に対するもつと積極的な存在感をひき出すことができるように思われる。

### 実験的「MINTI」MINTVS

一九七六年、バンクーパーでひらかれた国連人間居住会議「ヒタート」では、「よ



オフィス街の昼休み(オタワ)

## モントリオール

MONTREAL

モントリオールは、北米で「都市再開発」が最も成功した例としてよく引き合いに出される。ここでいう都市再開発(Montreal Renaissance)とは、古い建物を一掃した上で全く新しい町並みを作る方法である。

一九六〇年代の初め頃、モントリオール市には広大な鉄道線路がむき出しで姿をさらし、市内の景観を損っていた。そこでカナダ国鉄が中心となり、ニューヨークのデイペロツパ、W・セッケンデルフと、I・M・ベイ、M・バンダーローらすぐれた建築家を迎えて総合的な再開発プロジェクトに取組んだ。全部で九ヘクタール近くを占める線路を地下にもぐらせ、その下には地下街を、上にはビルや広場を築くという、当時としては画期的な総合開発を実施した。そしてモントリオールは創意工夫を感じさせる美しい都市に変身していった。

一方、開発の波は、十八・九世紀に建てられた歴史的な建物にも押し寄せ、そ



さまざまな壁画や彫刻が楽しめるメトロ構内

大半を「歴史的建造物」に指定し、許可なしに取り壊しや改築を禁止する立法措置をとった。同時に市は、古びたマーケットを改修し、街路には石を敷きつめたり、ガス燈に似た街燈を設置したりした。

旧市街区は再び活気と情緒を取り戻した。モントリオールの再建では、メトロ(地下鉄)も大きな役割を果たしている。その理由は、メトロが単なる足の利便にとどまらず、駅にさまざまな芸術的趣向をこらしているためである。各駅的设计は別々の建築家に腕を競わせ、構内には本格的な壁画や彫刻を配してある。ある批評家のいうように、モントリオールのメトロは「明かると太陽が駅の地下通路までさし込み、次から次へと芸術作品に出会い、実に気持ちの良い所だ」そして、それらが街全体の雰囲気作りに一役買っている。

主要なメトロ駅の周辺は、ホテル、銀

## トロント

TORONTO

カナダ最大の経済都市トロントは、中心部に壮観な高層ビル群がそびえている。その中にはシテイ・ホール(ビルジョー・レベル設計)、トロント・ドミニオン・センター(M・バンダーロー設計)、ロイヤル・バンク・プラザ(ボリス・ゼラファほか設計)、メトロ図書館(レイモンド・モリヤマ設計)などといった名建築も含まれている。

だが、一九七三年にトロント市は、四十五フィート(十三・五メートル)をこえるビルの建設凍結(モラトリアム)を打ち出した。オンタリオ州はこの決定を無効としたが、市は依然として僅かの例

これらの建物は老朽化とともに消滅の一手前にあった。たとえば文豪チャールズ・デイッケンズが投宿していたラスコホテルは簡易宿泊所に、愛国者ルイ・ジョセフ・パビノーの家は魚市場に、その他由緒ある家やビルが、倉庫や駐車場に変わっていった。

モントリオールでは、この趨勢を阻止する運動が、一応の成功を見ている。モントリオール市とケベック州は旧市内の大半を「歴史的建造物」に指定し、許可なしに取り壊しや改築を禁止する立法措置をとった。同時に市は、古びたマーケットを改修し、街路には石を敷きつめたり、ガス燈に似た街燈を設置したりした。

外を除いて高層ビルの建設を認めていない。したがってトロントは、今日、高層建築の傑作が肩を並べる中心部と、それを取り巻く小じんまりと住みやすい近隣地区とが興味ある対照をなしている。

ダウンタウンにあるキャベツタウンは、市のモラトリアムによって救われた街の一つだ。ここは、狭いが頑丈なレンガ造りの長屋式住宅が並び、ドアの上にはステンドグラスがはまり、家の前のささやかな庭には花が咲き乱れているといった、ごく庶民的な街だった。それが一九六〇年代になるとスラム化しはじめ、一部取り壊されたりしたが、モラトリア





オンタリオ湖を望むトロント市。中央に見えるのがCNタワー。

タートにむけてカナダのコミュニティ計画協会がまとめた小冊子(注2)は、カナダのさまざまな都市や地域で進められている「より住みやすい」コミュニティづくりの革新的なプログラムを多く紹介していて興味深い。土地利用、交通、地域管理、環境などの計画においてユニークなアイデアをとりあげている事例をはじめとして、すぐれた住宅の供給やコミュニティの活性化など、そして社会変化に対応する教育の機会、情報やコミュニケーションなどの新しい取り組みを、写真やイラストまじりで編集、各事例ごとに事業主体とその住所、電話番号などを記してリアクションを求めている。これを見ると、カナダのあちこちで、実にさまざまな実験やデザインが行なわれていて、それらが、いかにカナダの「住みやすさ」に貢献しようとしているかがわか

る。「住みやすさ」を求める夢や願望がまさに、コミュニティ計画のアイデアと行動力によって実っていくであろう有様を読みとれるのである。

## 多様性と調和

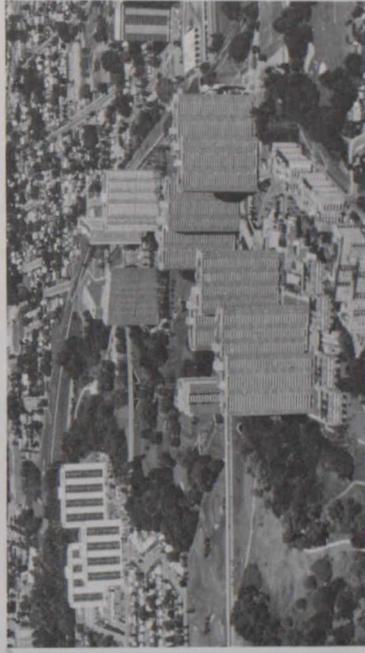
カナダでもっとも先鋭的な建築家のひとり、ジャック・タイヤモンドは、現代カナダ建築を論ずる小文(注3)の中で、カナダとアメリカとの相違を、都市や建築のあり方に触れながら指摘している。それによると、カナダの都市は、アメリカの都市のように激しい変化に出会っていないという。アメリカの場合、郊外に居住地を求めた結果、都心部が荒廃するのに対して、カナダの都市が、土地の多目的利用の形態をもつことによつて居住者≠所有者といった権利の容認が行われ、結果として、既存の建物を破壊して高層ビルを建設するような考え方に対する抵抗感を生みだし、古い建物のリサイクルが、困難を伴いながらもち取られていく実態があるとして、これを評価している。



ふだん着のモントリオール

ムによつて再びその価値を見直されるようになった。現在では都心部に近い住宅地として落ち着いたなすまいを見せている。またトロント大学に隣接する大学の街アネックスでは、六〇年代に町を二分する高速道路建設計画がたてられたとき、住民が結束してこれに反対し、街を救った。

最近、市が中心となつて、市内に大団地を建設した。セントローレセンス・マーケットに隣接した地区で、元は倉庫や空地だった場所に作つたタウンハウスと高層マンションからなる人口八千人の近隣居住区である。道路は従来のものをそのまま生かし、中央に帯状の公園、端に大マーケット、そしてオキーフ・センターやヤング・ヒールズ・シアターが隣にある。交通の便もよい。このプロジェクトには、周囲を高層ビルで囲まれた、壁内町。との批判もあるが、開発の進んだ



トロント市の新設住宅団地

大都市で、職、住、文化のバランスある町づくりがどんな形で可能なのかを探るひとつの試みではある。

## カルガリー

### CALGARY

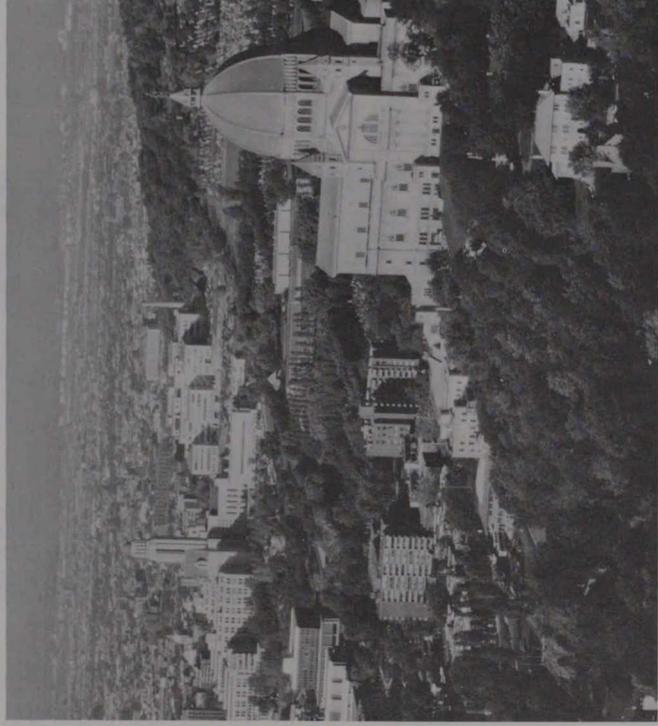
一九八八年の冬即オリンピックが開かれるカルガリー市は、カナダにおける石油産業の中心地として、ここ二十年間に目ざましい発展をとげた。

カナダの石油・天然ガス関係企業(およそ六百五十社)の実に八六パーセントがカルガリーに本社をおき、その他の業種においてもここに本社を設ける企業がふえた。こうした盛んな企業活動を反映

して金融機関の進出も相次ぎ、カルガリーがセントリオールを抜いてトロントに次ぐカナダ第二の金融センターになる日も近いといわれる。

当然、町の様相も一変した。一八七五年には荒野に藪がボツンとなつていただけだったカルガリーは、今や、大平原のマンハッタン。といわれるほど高層ビルの林立する近代都市に生まれ変わった。

アメリカの諸都市に見られる建築が、相互に何の関係もない孤立した建物の集合体にすぎず、各建物が不協和音を鳴り響かせているのに対して、カナダは、その都市におけるコミュニティー計画を通して、個人の満足よりも共同のための価値が重要な意味をもつような形で都市形成がすすんでいる、ともいう。このためカナダの都市には、「はなばなしい建築」が少ないことも事実であり、カナダの都市がさまざまな努力や手法の開発を繰り返しながら、一面において単調さをまねがれない、と指摘している。カナダの都市はいわば多様性に満ちており、それが単調さを招いたとしてもそこには都市の調和をはかるメカニズムが内在している



緑に囲まれたモントリオール市

ことが、彼の語り口からよくわかる。別のいい方をすれば、これらの特性こそ、「住みやすさ」を求めるカナダの都市の姿だといってよい。

### 「創造的妥協」

カナダの都市は、ジャック・ダイヤモンドの指摘をまっまでもなく、調和ある、多様性に満ちた性格を全般的にもっている。そしてそのスケールは人間的であり、表情は生態的、自然的であるといつてよい。しかし、それはある意味では、カナダの文化もそうであるように、いわゆる妥協の産物であるのかもしれない。

モントリオールは、万博やオリンピック

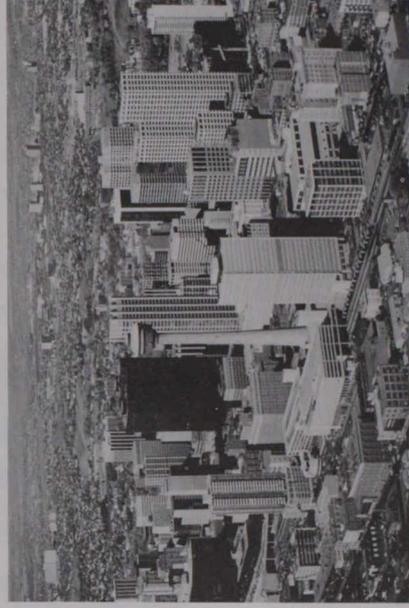
クのように世界が目をみはった施設をもちながら、市民の自慢の地下鉄サ・メトロが交差する中心部に都市の核がある。しかし、十八、九世紀のセンスをのこしたたなずまいと、ダウンタウンの躍動的なオフィス街とは対をなして、そのコントラストこそこの都市の魅力がある。セントローレンス川にちなむ歴史性と、フランス語の行き交う文化性が、こ

人口も急激にふえ(過去三年間で十万人増)、いま六十万人をこえる。

特に、弧を描いて流れるボウ・リバーの内側の長方形の都心部は、「カナダの都市の歴史の中では、これほどの規模で、

またこれほど密集してオフィス用高層ビルが建てられた例はほかにない」と、ある評者が述べているほどで、ミラー・ガラスやアルミに包まれたさまざまな形のビルが、はるか向こうのカナディアン・ロッキーを背景に美しく空にのびる。都心では、現在も約五十の高層ビルが八五年までの完成を目指して計画され、あるいは工事を進めている。

新築高層ビルには、地上十五メートルのところ隣接ビルと連絡するガラス張りの歩道が設けられている。連絡歩道網はやがては十九キロメートルにも達し、都心をビルからビルへと渡り歩ける“空



カルガリー市市中心部

中道路」となる。

こうした高層ビル・ブームには批判もある。“ビル風”や広場、あるいは交通網に十分考慮が払われず、ただ鉄とコンクリートとミラー・ガラスのジャングル

と化した、という批判である。

そこでカルガリー市では昨年二月に新しい都心計画案を発表、高層ビル建築による日照や風速に対する影響を少なくする方法を講じるほか、都心部でのアパート建設や露天市場の設置、広場の増設などを進めることになった。

また工費七千四百

万ドルの芸術センターが建設中で、さらに八八年の冬期オリンピックに関連してさまざまなスポーツ施設や文化施設も計画されている。軽量快速の通勤電車も昨年からは走るようになった。冬期オリンピックの開催で、カルガリーは再脱皮するに違いない。

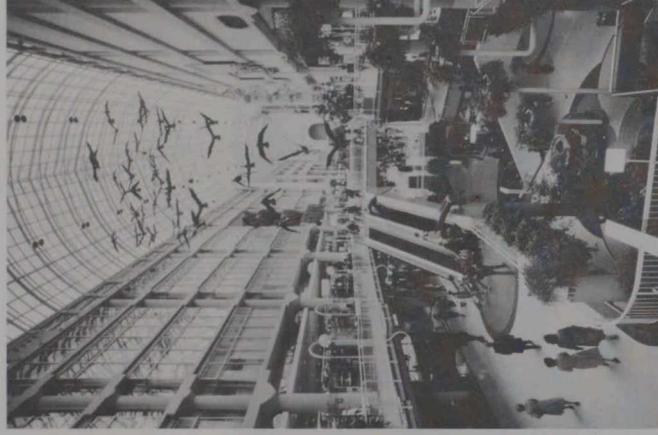
## バンクーバー VANCOUVER

バンクーバーは、都市として信じられないほどの自然条件に恵まれている。山

を背にして前面は海、澄んだ空気、年間を通じて快適な気温。そしていたる所に

の都市のニュアンスにひと役買っているのはいうまでもない。

いまやカナダでもっとも人口の多い都



トロントのイトン・センター

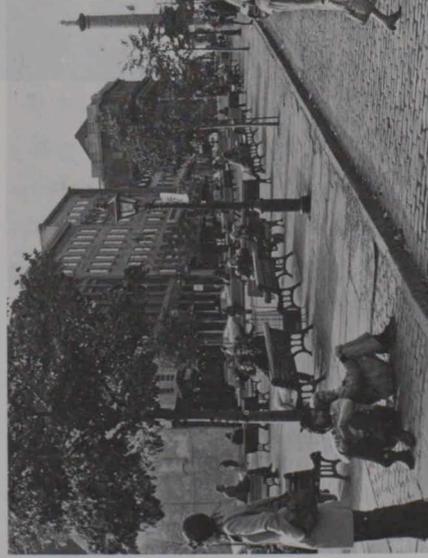
市となったトロントは、全般的にみて調和と多様性が象徴的に混在している都市である。全天候型街路のあるイトン・センターが、新しい都市の核として機能しながらも、これと隣接する各街区は、まさに多様な表情を共有している。そして都心部の近くに点在する人間くさい近隣コミュニティも、それぞれ独特の個性を有している。

そしてバンクーバーは、都市と大自然が、極めて人間的なスケールで共存している特徴と魅力を備えている。チャイナタウンの活気や、西部開拓の情緒ただよふガスタウンの雰囲気、さらにこの街に人なつこい彩りを与えているといつてよいだろう。

いずれの都市についても、都市の生きざまは調和と多様性において個性的であり、その意味では世界に君臨する巨大都市でもなければ成熟した民族の都市でも

ない。しかし、そうした性格自体が、もしそれぞれの都市における妥協の産物であるとすれば、その中に積極的な創造的な意味を見出さない限り、カナダの都市のアイデンティティはあり得ないとする考え方が、現実的な説得力をもつてくるように思われてならない。この考え方を、もし、創造的妥協（クリエイティブ・コンプロマイズ）といえるなら、である。そしてカナダの都市が「住みやすさ」を求めるがゆえに創造的妥協を思想とするなら、まさに、「住みやすさ」そのものを文化とするアイデンティティを見逃がすべきではない、と思う。

（北海道教育大学助教授リデザイン学）



モントルリオの古い街並み

注1 Perspective Canada による

注2 The Canadian Settlement Sampler

注3 Process No.5 に掲載

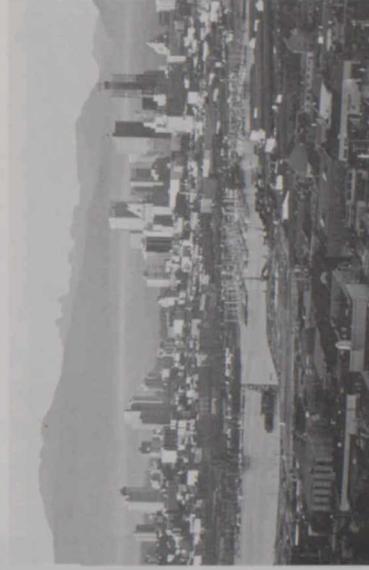
四季の花々と緑があふれている。

バンクーバーの都市開発は、土地の余裕がないために、最近まで空へ空へと伸びる傾向にあった。市内には近代高層建築がたち並び、また西部一の摩天楼を建てる州政府の計画もあったが、最近ではむしろ環境的にも機能的にも調和のとれた総合地区開発が目指されている。たとえば、アーサー・エリクソンが設計した市中心部のロフソン・スクエアは、市民センター（庭園、店、レストラン、保育所、スケートリンク等を含む）、裁判所、美術館からなる総合地区だ。

かつて移民労働者が多数流れこんだバンクーバーは、スラム改革が大きな課題である。

バンクーバーの発祥地ガスタウンは、赤レンガの道と建物で有名だったが、年代を経るにつれて老朽化し、一大スラムと化した。ガスタウンの復興は、地元美業家のイニシアチブにより、主に営利的見地から進められたが、古い建物や店の復元など、昔の街の面影を残す方向で行われた。いまではアティックやレストランで賑い、観光客の人気を集めている。

バンクーバー名物のチャイナタウンも再開発の対象となった。一九六〇年代にストラスコナ地区の取り壊し計画が持ち上がったが、住民の反対により市では計画を全面撤回し、代わって「コミュニティ改善開発計画」を発足させた。州政府と連邦政府もこれを援助して、八つの近隣住区の「オーバーホール」が行われた。各区の再生プランは画一でなく住民の意思と地区の条件に応じて、古い建物



バンクーバー市では入江や水路に接した地区の再開発が課題。

の保存もあれば、取り壊し、新築もある。そして全区とも公園とオープン・スペースを取り入れて、住みやすい街づくりが目指された。

バンクーバーで最大の難物は、海岸や運河に面した地区である。薄汚れた倉庫や作業小屋、老朽家屋が並び、あるいは朽ちかけた桟橋、砂利だらけの空地が放置されていた。

そうした中で見事な再生を遂げたのがフォールス・クリーク地区である。浄化された運河には多数のヨットがつながれ、岸からならぬ坂にかけて新築のコンドミニアム（分譲の低層マンション、テラスハウス）や改修された住宅、事務所が段々に並んで、新しい職住混合地区に変身した。

だが、ピアBC付近の中央海岸地区はまだ再開発の手がつけられておらず、今後の課題に残されている。

# カナダの冬は 祭りの季節

カナダの冬のイメージは「と問われたら、多くのカナダ人はカーニバルと答えるに違いない。あちらの村でも、こちらの町でも、寒気をついて楽しい行事が繰り広げられるからである。

二月はカーニバルの月。もとは中世ヨーロッパに発する四旬節（聖灰水曜日）からイースターまでの四十日間、直前のお祭り行事だが、カナダのカーニバルは、いわば冬が主役だ。

なかでも最も盛大で世界的にも有名なものが、二月五―十五日のケベック・カルナバルである。赤い帽子をチョコンとつけた雪ダルマ、ボンノーム・カルナバルが、「みなもの者、余が治世には悩みを忘れて楽しめよ」と言いながら、通りをねり歩く。

カーニバルの期間中、ボンノームが住む水の宮殿は、壁も、床も、階段も氷でできていて、銃眼つきの立派な胸壁やトポガンすべり台、それに牢屋まで備えた立派なお城だ。

ケベック市の旧市街区にあるカルナバル・ストリートでは、雪と氷の芸術の祭

典が繰り広げられる。カーニバルの熱気をいやが上にも盛り上げるのは、いろいろな競技大会やコンテストだ。ケベック市では、セントローレンス川のカヌー横断レースがハイライトになる。巨大な氷

盤がさかんに流れてくる川を、五人乗りのカヌーが向こう岸まで一・六キロの白熱したレースを展開する。川の真中で氷盤にぶつかったりすると、漕ぎ手がカヌーから氷盤によじ登って重いカヌーをやっこらさと引き上げ、急いで氷の上を走っていく姿など、とてもユーモラスだ。

ブリティッシュ・コロンビア州バーノンのウインター・カーニバル（二月六―十五日）は、スノーゴルフ、氷上野球、障害物スキーが名物である。

BC州のゴルフ・マニアが、夏を待ちきれずに始めたのがスノーゴルフ。これはまたたく間に広まった。

ゴルフホールは色付きのテニスボール、クラブはほうきでも棒でも何でもいい。ホールは雪を掘って水をかけ、凍らせたもの。押し固めた雪と氷がグリーンになる。

カナダでは、野球もウインター・スポーツとなる。ルールは普通の野球と変わらない。ただ、スケートをはいて打ったり投げたりするのは、相当骨が折れる。障害物スキーも面白い。坂を登り、巨

大なタイヤをはい上り、あるいは池を回

りこんだりしてゴールインしなければならぬので、このレースでこれまでスピード記録が出たという話はいずれ聞かない。もちろんまじめなスキー大会も行われている。これには米国や欧州からも、たくさんの方が参加する。そのほかスノーモービル大会、クロスカントリー・レース、雪合戦大会、チビツ子アイスホッケー大会、カーリング大会、それにベトナム・シヨールまでがバーノンの祭りを彩る。そしてカーニバルの夜は、毎夜、仮装舞踏会でふけていく。

BC州キンバレーの冬祭り（二月十一



ケベック・カルナバルの人気者「ボンノーム」

―十五日）も楽しい。キンバレーは「ロッキーマウンテンの香り」を漂わせた町だ。ビール祭りやドイツ音楽の夕べで賑わう中で、呼び物のこっけいなレース「シユームーシグ」が行われる。これは一種のスキーなのだが、一台のスキー（ただの板切れ二枚を革ひもで足にくくりつける）に二人がのり、声をかけあいながら坂をすべり下りる競争だ。二人の息の合ったコントロールがなかなか難しい。そのほか綱引き、凧あげ大会などもある。

そして、マニトバ州セントボニフェスのボヤジャーの祭り（二月十四―二十二日）がある。ボヤジャーとはカナダの草創期に活躍した狩猟者や冒険家のことで、この祭りは、勇敢な一人のボヤジャー、ジャン・バプティスト・ラジモジエールがある使命のためにセントボニフェスからモントリオールまで深い雪の中を歩き通した壮筆を記念したものだ。だから祭りの行事もそれにちなんで、かんじき競走、クロスカントリー・スキー・マラソン、ひげコンテスト、ジグダンス・コンテスト、モカシン・ダンスなどと一風変わった催しが展開される。

ボヤジャーの祭りで最高に沸くのは、犬ぞりレース。かつてカナダの冬に欠かせない存在だった犬ぞりの奮闘に、観客は郷愁と愛着をこめて声援を送る。

こうして厳しい冬も、華やかな祭りの色で塗られていく。そして、人々の間に祭りの興奮がさめかけた頃、カナダには遅い春がやってくる。



## 英仏系以外の民族に照射

デビッド・スミス

**カ** ナダ研究の動向を文献から概観するという試みも、早や3回目を迎えた。今回は、多文化主義(multiculturalism)の研究を取り上げてみよう。

**カ** ナダは、ご承知のように、多民族社会である。この多民族性という性格の及ぼす影響について、研究者が関心を向けるようになったのは、比較的最近のことである。ただし、次の3点は例外だ。J.T.M. Anderson著 *The Education of the New Canadian* (Toronto: J.M. Dent, 1918)、およびシリーズ *Canadian Frontiers of Settlement* (Toronto: Macmillan, 1936 and 1940)のC.A. Dawson他著 *Group Settlement: Ethnic Communities in Western Canada* (第7巻)と *Pioneering in the Prairie Provinces: Social Side of the Settlement Process* (第8巻)。そして Robert England著 *The Central European Immigrant in Canada* (Toronto: Macmillan, 1929)。

### 政府が関心を喚起

**さ** て、多文化主義に対する今日の活発な関心を喚起・奨励したのは、連邦政府や州政府であった。そのきっかけとなったのは、1969年の連邦政府への報告書 *Report of the Royal Commission on Bilingualism and Biculturalism* (Ottawa: 1969)の第4編“The Cultural Contribution of the Other Ethnic Groups”である。州もまた、多文化主義への関心を育成するのに熱心で、政府部内に専門の担当部署や機関を設けたりしている。平原3州では、とくにこの傾向が強い。マニトバ、サスカチュワン、アルバータの平原3州では、連邦政府と同様、従来から多文化主義の研究成果の出版に助成金を出してきた。

**現** 在では、各地の研究グループにより多数の本が出版されているが、紙面の制約上、ここにご紹介できないのが残念である。また、出版各社の図書目録を埋めている各種の回想記も見逃せない資料だが、これも別の機会にゆずらなければならない。ここでは、比較的一般性の濃い研究を若干あげておこう。まず、Howard Palmer著 *Immigration and the Rise of Multiculturalism* (Toronto: Copp Clarke, 1975)、そしてGeorge Woodcock and Ivan Avakumovic著 *The Doukhobors* (Toronto: McClelland Stewart, 1975)。Wsevolod Isajiw編 *Identities: The Impact of Ethnicity on Canadian Society*, Canadian Ethnic Studies Association, V (Toronto: 1977)も、非常に興味深い本だ。

**著** 者のIsajiwは、この本(および他の論文)の中で、言葉というものが単にコミュニケーションの手段としてでなく、社会化の手段としてあるいは集団の象徴としての意義をも持っているのだという、重要な指摘を行っている。これは確かに真理である。だがこの真理も、従来の多文化主義研究にあってはとかく看過されてきたし、もうひとつの歴史的事実、つまり(英仏系以外の)ヨーロッパ人がカナダ東部へ移住してきたのが第2次大戦後であったのに対して、西部への移住はその30年以上前から始まったという事実もまた、見逃されがちだった。

### 2 言語主義政策との関連も問題

**多** 文化主義自体が、そもそも論議の対象である。多文化主義といっても、政府の政策という次元においては、(英仏両語以外の)第3の言語の教育が全く問題にされていない。連邦政府の推進する2言語主義(bilingualism)政策と多文化主義とはどう関係するのかも、議論の分かれる所である。この点については、たとえば、A.W. Rasporich編 *The Social Sciences in Public Policy in Canada* (Vol.1, Calgary, 1979)の中の論文、Jean Burnet, “Separate or Equal: A Dilemma of Multiculturalism”を読んでいただきたい。多文化主義に対する連邦政府の立場を知りたい人には、K.G. O'Brien, J. G. Reitz および I. Kuplowskaの共同執筆になる *Non-Official Languages: A Study in Canadian Multiculturalism* (Ottawa: 1975)と *A National Understanding: Statement of the Government of Canada on the Official Language Policy* (Ottawa: 1977)の2冊が参考になるだろう。いずれもカナダ政府が発行したものである。

**雑** 誌で最も参考になるのは *Canadian Ethnic Studies*。14年の歴史をもつ伝統ある研究誌である。

**以** 上、今回は、多文化主義の研究文献をいわゆる“第3のカナダ”を扱ったものに限った。ここではふれなかったが、原住民の研究は最近急速な成長を見せている分野であり、今後の成果に注目すべきだろう。そのほか英国系カナダの研究、あるいはフランス系カナダの研究についても、今回はふれなかった。英国系カナダについては、カナダに対するその貢献を意識的に追究した文献がほとんどないからだ。一方、フランス系カナダの研究はさかんであり、英語で書かれた文献もたくさん出されている。次回は、このテーマを追ってみたい。

(カナダ講座担当客員教授)

